

令和元年5月30日現在

機関番号：47120

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04027

研究課題名(和文) 道德規範からの逸脱行為と匿名性

研究課題名(英文) Deviation from moral norms and anonymity

研究代表者

釘原 直樹 (KUGIHARA, Naoki)

東筑紫短期大学・食物栄養学科・教授

研究者番号：60153269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：人は自分の行動が他者に知られない場合、不正行為をすることがある。不正行為には様々なものがあるが、本研究ではプロ・スポーツの八百長や付和雷同的同調、服従現象などを取り上げ、分析した。プロ・スポーツの八百長に関しては、技量審査場所以前の八百長問題がマスメディアによって取り上げられた時期から、勝敗の出現パターンが変化したことがわかった。同調実験に関してはAschの実験結果と異なり、サイズが4人を越えても同調率が高くなることが明らかになった。それから、服従実験に関しては、わが国の服従率はミルグラムやBurgerの実験結果より若干高いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は八百長や同調行動、服従行動といった、集団のネガティブな面、陰の面についての実証的研究を行った。この分野の研究の遂行には倫理的問題があり実施が困難な側面がある。そのために長年にわたって研究がほとんどなされてこなかった。本研究では倫理的問題に配慮しつつ、アーカイブデータの分析や実験室実験を通して、これらの問題にアプローチした。研究の結果、同調や服従は時代や国を超えて存在し、しかもその傾向や程度は低下するどころか、かえって上昇していることが示唆された。また、スポーツの八百長のような不正行為の抑制には当事者の是認以前になされるメディア報道が影響することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：People may cheat if their actions are not known to others. There are various types of fraud, in this research, we examined and analyzed the fixed fights of professional sports, conformity, and the obedience phenomenon. With regard to the fixed fights of professional sports, it was found that the pattern of the victory and defeat had already changed from the time when the fixed fights problem was taken up by the mass media before holding of the skill examination Sumo tournament. Unlike the results of Asch's experiment, it became clear that the conformity rate is high even if the size exceeds 4 persons. It became clear that the obedience rate of our results was slightly higher than those of Milgram and Burger's experiments.

研究分野：社会心理学

キーワード：不正行為 八百長 同調 服従 道德規範

1、研究開始当初の背景

申請者はこれまでパニックや災害時のスケープゴートイングなどの群集行動や社会的な手抜きに関する実証的研究を行ってきた。これらの研究を行ううちに、集団による反社会的行為や怠慢は背後には共通した同じメカニズムが働いていると考えるようになった。例えば相撲の八百長は長年の慣習として行われてきた可能性がある。それから多くの力士が行っていたという事実もある。八百長をしても「識別される可能性」は低く、八百長をして勝ち越せば地位と名誉と金銭を得ることができるという「道具性」は高く、多くの仲間が八百長をしているのに自分が真面目に勝負をしても馬鹿らしいと考える「努力の不要性」を力士が意識していた可能性が高い。こういった要因は全て社会的な手抜きを触発する要因でもある。それから野球のアウェイチームの怠慢プレーに関しては、申請者はこれまでホームアドバンテージの研究を行うことを通じてその存在を意識してきた。そしてこのような道徳規範から逸脱する行為の背後には、同調や服従のようなメカニズムも存在していると考えた。そこで本研究はスポーツデータの分析と同調や服従の実験を実施することによって、道徳規範からの逸脱行為を分析することを試みることにした。

2、研究の目的

他者の目が届かなかったり（識別・評価可能性）、周りの人も不正行為を行っていたり（努力の不要性）、不正行為を行うことが当人の利益になる（道具性）ということであれば、多くの人には不正行為の誘惑に駆り立てられることが考えられる。しかし社会的な不正行為に関するまとまった心理学的研究は行われていない。ただし、没個性化（de-individuation）の研究はこれに関連していると言える。没個性化とは、匿名性が高い状況（例えば、人が大きな群集の一人になった場合のような）では他者からの評価が気にならなくなるために、罪や恥の意識が低下することである。そのために衝動的で反社会的な反応が触発される（Zimbardo, 1969）。匿名性が高くなるということは「識別・評価可能性」が低下しているということである。それから同調行動に関する研究も関連していると考えられる。同調すれば、個人的な努力を要せず、また識別性も低くなる。また他者から奇異な目で見られることはなく安心できるので、その意味で当人にはメリットになる。さらに服従行動にも同様のメカニズムが働いていると考えられる。命令者に服従すれば個人的な努力は不要であり、また服従することにより何らかの報酬を得ることができる可能性がある（道具性）。このように、上記の現象には、その背後に共通したメカニズムが働いていると考えられる。そこで本研究は上記の視点から、八百長や同調、服従といった、集団のネガティブな側面の分析を試みることにした。

3、研究の方法

大相撲の八百長に関しては1960年代から週刊誌などでその存在が指摘されていた。しかしその都度相撲協会は否定したり名誉毀損で告訴したりして、騒動に幕引きをした。しかし2000年1月には元小結の板井氏が週刊現代で告白し、また日本外国特派員協会で講演もした。そして、

2011 年には明白な証拠（警視庁が押収した携帯電話のメール）が示された。そのため 2011 年 5 月の本場所は技量審査場所となった。ここでは NHK による生中継はなく入場料も無かった。また、八百長を防止するため支度部屋に監察委員を配置して監視したり、力士の携帯電話を預かるなどした。そこで本研究では、八百長の発覚や報道、そして技量審査場所の実施が勝敗分布にどのように影響したのかを検討した。そのために、勝敗の確率分布からのずれについて吟味した。8 勝以上が勝ち越しになるので 8 勝することは力士にとって死活問題である。もし 8 勝の生起確率が偶然の確率分布より異常に高ければ何らかの不自然な力が働いていることが考えられる。第 2 は千秋楽で 7 勝 7 敗の力士がすでに勝ち越しを決めている 8 勝 6 敗の力士と対戦した場合の勝率を検討した。確率論的には勝率は 5 割以下となるはずであった。分析は 1970 年 1 月場所から 2016 年 3 月場所の幕内と十両の全取組 (8729) を対象とした。データソースは朝日新聞のスポーツ欄であった。

服従実験については、実験参加者の募集はインターネット調査会社を通じて行なった。精神疾患の経験がある者を実験に参加させないようにするために病歴を尋ねた。実験参加者は男性 8 名、女性 7 名であった。そのうちの 1 名はスクリーニングの結果、不参加となった。実験手続きは Burger (2009) の方法と類似の方法を採用した。実験参加者は 2 回のセッションに参加した。第 1 回目は臨床心理士によるスクリーニングである。第 2 回目が実験である。本実験はいくつかの点で Milgram のものと異なる。例えば実験を 150 ボルトで終了する。生徒は 75V の地点から 15V 上昇する毎に「うっ」と叫び、120V で「おい、これ本当に痛いよ」という発言をするが、150 ボルトの時点で明確に「実験を離脱したい」と主張する。具体的には次のような発言を行う。「うっ、先生、もう耐えられません。ここから出してください。心臓がわるいと言ったでしょう。心臓がドキドキしてきています。もうこれ以上続けたくありません。もうやめます。お願いだから出してくれ。」この発言にもかかわらず教師役の実験参加者が実験を継続するか否かを確認した。このように 150 ボルト時点で実験を終了するために実験参加者に過大なストレスを加えることはなかった。

同調実験については Asch の古典的実験と類似の手続きで実験を行った。異なるのは刺激を視認してから回答するまでの反応の遅延（反応潜時）を測定したことである。それをするために下記の実験設備を用意した。実験室には刺激カードを前面に置き、それを中心にして八の字型に机を配置した。椅子は 8 脚（8 人分）用意した。机の前面には高さ 140cm の衝立を配置した。実験参加者が起立すれば、前方を視認することが可能であった。この衝立は実験参加者が刺激を見てから回答するまでの反応潜時を測定するために設けたものであった。本研究では、集団サイズの効果を見るために、実験参加者もサクラになった。最初 2 人集団から始めて 1 人ずつサイズを増やし最終的に 8 人集団になるまで実験を行った。その際、各サイズの最後の人が実験参加者となり、その他の人にはサクラの役割を果たしてもらった。

4、研究成果

相撲のデータの分析の結果、2000 年以前（八百長問題が掲載された週刊現代発刊以前）は 8

勝7敗の出現確率は偶然よりもかなり高く、逆に7勝8敗はかなり低いことがわかった。それに対して、2000年以降は8勝7敗の出現確率は偶然の確率とほぼ等しくなったが、7勝8敗の割合はそれほど変化がなかった。さらに、0勝~6勝や10勝~15勝の割合が2000年以降増加していることが示され、弱者と強者の格差傾向が顕著になっていることがわかった。そして、千秋楽で勝ち越しがかった力士がすでに勝ち越しを決めている力士(8勝6敗)と対戦した場合の勝率に関して、2000年以前は勝率が80%以上であったが、それ以降は60%台となっていた。いずれにせよ技量審査場所開催より、それ以前の週刊誌報道が勝敗パターンに強く影響していることが示唆された。これはある意味で予想外の結果であった。

服従実験については、下記の結果が得られた。実験参加者14名中13名が実験者の要請に従った。日本(本研究と小森(1982年実施)の150Vまでのデータをプールしたもの)と米国のデータ(BurgerとMilgramの150Vまでのデータ)を比較した結果、150Vの地点では米国より日本の方が、若干服従率が高いことが明らかになった。次に、本研究と150Vまでの小森のデータとの比較をおこなった結果、有意差は見いだされなかった。この結果は、日本における1982当時の服従率と現代のそれとは殆ど差がないことを示唆している。それから、発言に関する分析結果から、実験参加者全員が仕事の責任を果たすこと、また14人中12人が仕事の難しさや緊張に言及していた。さらに学習者に対する同情や心配に関する発言をしていた参加者が9割近くいた。このことから参加者は仕事と学習者に対する心配の板挟みになっていることがうかがえた。ただし、予想されたように学習者に対する思いやり、共感、同情はあってもそれが、実験者の要求を止める力にはなっていないことが明らかになったとも言える。いずれにしても服従行動の研究結果の頑健性は文化や時代を超えていることがうかがえた。

同調実験については、下記の結果が得られた。Aschの実験結果は2人3%、3人13%、4人33%、5人35%、9人32%であったが、本研究の結果は2人17%、3人24%、4人32%、5人57%、6人52%、7人62%、8人65%であった。この結果は、日本人の方が1950年代のアメリカ人より同調率が高いことを示している。さらに次のことが明らかになった。1、女性の同調率が高い、特に集団サイズが大きくなると女性は同調しやすくなる。2、高年齢の女性は特に集団サイズの影響を受ける。それに対して男性では若年者より高年齢者の方がかえって集団サイズの影響を受けない。以上の結果は現代の中高年と女性は集団圧力に弱い面があることを示している。

今後は、研究範囲を拡大する。スポーツデータに関してはプロ野球や高校野球の勝敗分析を行い、不自然なデータの出現について分析する。服従実験に関しては、服従実験の目撃者の反応について吟味する。同調実験に関しては判断の迷いの程度を表している反応の遅延について詳細に分析する。

5、主な発表論文等

[雑誌論文](計12件)

高原 龍二・釘原 直樹(2018). モノレール緊急停止時の適切な案内方法の検討:チャンネルと案内間隔を要因としたシミュレーション実験, 産業・組織心理学研究, 32, 43-54. 査

読有

- 曹 美庚・釘原 直樹 (2017). 親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究, 応用心理学研究, 43, 45-53. 査読有
- 内田遼介・河津慶太・釘原直樹 (2017). 集団凝集性に対する集合的効力感の散布度の予測力, 体育学研究, 62, 313-321. 査読有
- 内田 遼介・釘原 直樹・東 亜弓・土屋 裕睦 (2017). 過去経験が集合的効力感に及ぼす影響 成員の道具性に着目した検討, 心理学研究, 88, 219-229. 査読有
- 内田 遼介・釘原 直樹・手塚 洋介・國部 雅大・土屋 裕睦 (2016). スポーツ集団内における集合的効力感の評価形成過程: 成員の課題遂行能力に着目した検討, 実験社会心理学研究, 56, 33-43. 査読有
- 大工泰裕・釘原直樹 (2016). 詐欺場面における被害者への原因帰属が脆弱性認知に及ぼす影響, 応用心理学研究, 41, 323-324. 査読有
- 武藤麻美・釘原直樹 (2015). 精神障害者に対する心理的排除に影響を及ぼす不安度要因および理解度要因について, 病院・地域精神医学, 57, 60-68. 査読有
- 武藤麻美・釘原直樹 (2015). 空間的距離の認知が社会的距離に及ぼす影響 一外集団間の差異に焦点を当てて一, 応用心理学研究, 41, 207-216. 査読有
- 武藤麻美・釘原直樹 (2015). 精神障害者に対する社会的距離に影響する要因 統合失調症患者への認知における帰属複雑性と曖昧さ耐性の効果の検討, 応用心理学研究, 41, 10-17. 査読有
- 阿形亜子・釘原直樹 (2015). 集団成績フィードバックが社会的補償に及ぼす影響, 応用心理学研究, 40, 226-227. 査読有
- Muto, M., & Kugihara, N. (2015). Psychological distance and likeability of in-or out-group targets who hold different opinions, *Psychologia*, 58 36-48. 査読有
- Teraguchi, T., & Kugihara, N. (2015). Effects of labeling and group category of evaluators on evaluations of aggression, *PLoS ONE*, 10(12), e0144384. doi:10.1371/journal.pone.0144384 査読有

[学会発表] (計3件)

釘原直樹・寺口司・阿形亜子・内田遼介・井村修 (2017). 日本人を対象とした服従実験 Milgram (1974)や Burger (2009)の実験との比較, 日本社会心理学会第58回大会

釘原直樹 (2016). 大相撲八百長問題が勝敗分布に与えた影響, 日本社会心理学会第57回大会

釘原直樹・寺口司・内田遼介・阿形亜子 (2015). Asch型同調実験(集団サイズ2人-8人)の30年ぶりの追試 現代の中高年と女性は集団圧力に弱い, 日本社会心理学会第56回大会

[図書] (計2件)

釘原直樹 (2017). あなたの部下はなぜやる気のあるふりをするのか ポプラ社 199 ページ

釘原直樹 (2015). 腐ったリンゴをどうするか 三五館 202 ページ

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/kugiharanaoki/home>

6、研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名： 植村 善太郎

ローマ字氏名： UEMURA, zentaro)

所属研究機関名： 福岡教育大学

部局名： 教育学部

職名： 教授

研究者番号： 20340367